

就農相談に70人超来場

“気軽に農業始められる場”PRも ぎふアグリチャレンジフェア



相談に訪れた就農希望者らでにぎわうブース

【岐阜】県のワンストップ農業支援窓口「ぎふアグリチャレンジ支援センター」(田口博康センター長)は5月30日、岐阜市で「ぎふアグリチャレンジフェア」を開催した。当日は70人を超える就農・就業希望者が来場し、農業会議、市町村、JFA(岐阜)農業者など22団体が25のブースを設け相談に応じた。

フェアでは、新規就農者の体験発表が行われ、2023年にイチゴで就農した岐阜市の三浦隆志さん(46)と、22年に冬春トマトで就農した海津市の東野竜童さん(37)が自身の経営概要のほか、就農して良かったことや心構えなどを語り、来場者は真剣に耳を傾けていた。

県からは、新規就農に対する各種支援策の紹介があった。また、今回は県の「アグリパーク構想」推進ブースが設けられ、気軽に農業を始められる場”作りを県内各所で進めている取り組みをPRした。

同センターは、今後も個別就農相談と年2回のフェアを計画している。

ジビエマイスターが営むレストラン

農カフェ ラビット 長野・大町市

雄大な景色 自然の恵み堪能



レストランを望む遠景



野菜をふんだんに使ったジビエメニュー

【長野】自然豊かな大町市美麻に、信州ジビエマイスターの女性シェフが営むレストランがある。シェフは狩猟免許所持者の児玉信子(46)で、経営する「農カフェ ラビット」では地元美麻産ジビエや店の前に広がる自家農園で採れたばかりの野菜を使ったメニューが大人気だ。

鹿肉カレーや鹿ソーセージなどのジビエ料理は食べやすくなるように工夫され、ジビエが苦手な人には免疫力をアップする野菜をたっぷり使った

農カフェ ラビット(岐阜市)の二次元コード

Instagramの二次元コード

店舗情報へは、上の二次元コードから。

(北アルプス地区農業委員会協議会)

黒大豆枝豆の増収技術を開発

緑肥のすき込みで41%収量アップ



緑肥(ヘアリーベッチ)のすき込み作業

【京都】京都府農林水産技術センター(農林センター)環境部では、緑肥(マメ科作物のヘアリーベッチ)を5月にすき込み、地力を維持しながら黒大豆枝豆の増収を実現する土壌管理技術を開発した。

昨年の試験栽培では、「紫ずきん2号」の収量が26%増、「紫ずきん3号」の収量は41%増となった。また、地力の指標となる土壌中の全炭素量は、緑肥のすき込み後に増加。枝豆栽培後、緑肥のすき込みは、

地域の名所にしたい

宵の口にオープンする直売所



運営メンバー(前列右から2人目が中西さん)

【和歌山】「夜に直売野菜を売ったら面白そう」との思いから2022年12月に始めた海南ナイトマーケットは、毎月第3金曜日の午後4時5分、海南市の大野中野で開業。運営するのは、海南市でミニトマトを生産する中西康介さん(42)ら。和歌山や海南市の農業者5人、夕方からの営業のため、仕事帰りや学校帰りの子どもを迎えのあとに気軽に立ち寄れる。

新規就農・就業マッチングフェア

規模拡大進む稲作経営で急募モード

【新潟】県と県農業会、県農林公社などが主催する「新規就農・就業マッチングフェア」が6月6日、新潟市西蒲区の県農業大学校で開催された。新規就農希望者や農業法人への就職を希望する青年、学生など89人が参加。就農希望者らを受け入れたい求人側の農業法人や個人経営29経営体が出展したほか、九つの組合や自治体などが参加者の相談に応じた。



「相談者から真剣さが伝わってきた」と話す山波農場・山波社長(奥)

【石川】川北町で8月1日(土)、「川北まつり」が開幕される。手取川の河川敷を舞台に繰り広げられるこの祭りは、豊作の祈りを込めた「虫送り太鼓」や「かがり火」、1934年の大洪水で犠牲となった先人たちの御霊を慰める「送り火」など、

真夏の夜彩る音と光の祭典

【石川】川北町で8月1日(土)、「川北まつり」が開幕される。手取川の河川敷を舞台に繰り広げられるこの祭りは、豊作の祈りを込めた「虫送り太鼓」や「かがり火」、1934年の大洪水で犠牲となった先人たちの御霊を慰める「送り火」など、

週末農業でブドウ栽培

楽しいことをできる範囲で

【兵庫】実家が営む「高見農園」でブドウ栽培を手伝う杉原希さん(45)は、製菓会社に勤める傍ら、週末農業に従事している。杉原さんは大学院で免疫学を学んで大阪市の製菓会社に就職。2011年に神戸市にある実家の近くに家を建て、Uターンしたが、農業には従事していなかった。その後、コロナ禍で仕事がテレワークになったことや、年齢を重ねる両親の姿に「何もしないのは申し訳ない」と、23年秋から週末にブドウ栽培を手伝い始めた。ブドウが実った時の感動や、両親にも感謝されるなど



【和歌山】「夜に直売野菜を売ったら面白そう」との思いから2022年12月に始めた海南ナイトマーケットは、毎月第3金曜日の午後4時5分、海南市の大野中野で開業。運営するのは、海南市でミニトマトを生産する中西康介さん(42)ら。和歌山や海南市の農業者5人、夕方からの営業のため、仕事帰りや学校帰りの子どもを迎えのあとに気軽に立ち寄れる。

【兵庫】実家が営む「高見農園」でブドウ栽培を手伝う杉原希さん(45)は、製菓会社に勤める傍ら、週末農業に従事している。杉原さんは大学院で免疫学を学んで大阪市の製菓会社に就職。2011年に神戸市にある実家の近くに家を建て、Uターンしたが、農業には従事していなかった。その後、コロナ禍で仕事がテレワークになったことや、年齢を重ねる両親の姿に「何もしないのは申し訳ない」と、23年秋から週末にブドウ栽培を手伝い始めた。ブドウが実った時の感動や、両親にも感謝されるなど

中日本版

各地の話題

Instagramの二次元コード